

音楽科の授業を生活とつなぐために

ポピュラー音楽を取り入れた授業実践

～学習内容と対応させた効果的な取り入れ方～

丸亀市立城西小学校
教諭 高塚 仁志

1 はじめに

「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編」では、教科の目標の中に「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」を育成することが示されており、音楽科の授業で学んだことが授業外の場面においても生かされ、子どもたちが日頃耳にする音や音楽と豊かに関わっていけるようにすることが求められているといえる。しかし、教科書に載っている音楽と、子どもたちが日頃耳にする音楽には乖離があるのではないだろうか。アンケート（令和 6 年 4 月、6 年生 92 名）で子どもたちの好きな音楽を聞いたところ、J-POP や K-POP などのポピュラー音楽と回答した子どもの割合が約 98%であった。現行の教科書にもポピュラー音楽が採用されているが、子どもたちの回答の大半はここ数年の間に発表された流行の曲であるため、教科書に掲載されているものとは異なる。とはいえ、教科書教材として扱われているのは古くから歌い継がれてきた名曲や世界的に有名なクラシック曲など、素晴らしい音楽ばかりである。これらのことから、音楽科の授業における学びを教科書だけで終わらせてしまうのではなく、子どもたちが普段の生活の中でふれる音楽に生かすことができるように、教師がその間をつないでいくことが大切であると考え。そこで、教科書教材の学習内容と対応させながら、実際に授業にポピュラー音楽を取り入れる実践を行った。

2 実践の内容・方法

（1）教科書教材を学習した後でポピュラー音楽を取り入れた実践

以下の実践は主に題材の終末において、授業で学んだ視点を基にポピュラー音楽を鑑賞することで、その特徴などが身近な音楽にも生かされていることを知り、教科書教材の学びを深めることをねらったものである。

① 第 6 学年『つばさをください』（歌唱）

この実践は、まず、『つばさをください』を前半と後半に分けた時の曲の特徴の違いを捉え、歌い方の工夫に生かしていくことをねらいとして授業を行った。後半は「この大空に」から始まる、いわゆるサビの部分であり、ここで子どもたちが捉えた特徴の違いは、強弱（弱い→強い）、リズム（長い音→細かい音）、旋律（低い→高い）、音楽の縦と横の

	強弱	リズム	音の重なり	旋律	音色 (はり)	その他
「つばさをください」	弱→強	長い音→細かい音	ハモリなし	低い→高い	しずかに	5
「三原色」	弱→強	長い音→細かい音	ハモリあり	低い→高い	しずかに	5
「Bling-Bling-Bling-Bling」	弱→強	細かい音→長い音	ハモリあり	低い→高い	しずかに	5
「千本桜」	弱→強	長い音→細かい音	ハモリあり	低い→高い	しずかに	4
「水戸黄門」	弱→強	長い音→細かい音	ハモリあり	低い→高い	しずかに	4

【五つの要素の観点で特徴を探る】

関係（斉唱→合唱）、音色（伴奏が静か→盛り上がる）の五つであった。そこで、教師から、「この特徴って『つばさをください』だけに言えることなのかな」と投げかけた。すると子どもたちは、既習の教科書教材曲や、普段聴く音楽がどうだったかを想起し、「他の曲でも大体そうなっていそう」「全部がそうというわけではないんじゃないかな」といった予想を立てていた。次に、それを確かめるために子どもたちに普段聴いている曲を尋ね、リクエストされた『三原色』（YOASOBI）、『Bling-Bang-Bang-Born』（Creepy Nuts）、『千本桜』（黒うさ P）、『水平線』（back number）をその場で実際に流しながら、サビとそうでない部分の変化を確認していくという授業を行った。その時間に確認したのは4曲ではあったが、そこから他の曲も想起し、「リズムは曲によるが、その他は多くの曲で『つばさをください』と同じ特徴が使われていそうだ」という結論に至り、多くの音楽で使われている特徴について理解することができていた。

② 第5学年「組曲『カレリア』から『行進曲風に』」（鑑賞）

『行進曲風に』（シベリウス）の学習では、曲想の変化を時間で区切り、その変化の理由を旋律と音色の視点で捉えながら分析していった（左下写真）。そこで、「みんなが普段聴く曲でも同じように分析できそうじゃないかな」と問い、当時特に流行していた『アイドル』（YOASOBI）を、『行進曲風に』の授業と同じように曲想の変化を時間で区切り、その理由を探っていく（右下写真）。子どもたちは、めまぐるしく曲想が変わる『アイドル』の面白さを味わうとともに、クラシックの曲とは違って歌詞の内容が曲想と深く関係しているという特徴にも気付くことができていた。



【『行進曲風に』で曲想の変化を探る】



【『アイドル』も同じ形態で分析】

③ 第4学年「拍子と旋律」（歌唱・鑑賞）

「拍子と旋律」の学習では、『トルコ行進曲』（ベートーベン）、『メヌエット』（ペツォルト）を鑑賞したり、『ラバーズコンチェルト』を歌ったりしながら、2～4拍子のそれぞれの拍子の指揮の振り方や曲想の違いとその面白さを感じ取れるようにすることをねらいに授業を行った。その後、「この曲は何拍子でしょう」と問い、『私は最強』（ウタ from ONE PIECE FILM RED）、『ププッとフムッとかいけつダンス』（アニメ「おしりたんてい」主題歌）の2曲を鑑賞させた。この2曲に共通するのは、基本は4拍子であるが、曲の一部分で3拍子が使われるということである。子どもたちは曲を聴きながら指揮を振ることで拍子の違いに気付き、3拍子は4拍子に比べてゆったりとした印象を与え、曲想を大きく変化させるという効果について理解を深めていった。

(2) ポピュラー音楽を教科書教材の学習の導入に取り入れた実践

以下の実践は、ポピュラー音楽を題材の導入で扱うことで、子どもたちの興味・関心を高め、さらにそのような身近な曲でも使われている特徴について学んでいきたいという意識をもちながら教科書教材に入っていくことをねらったものである。

① 第5学年「低音のはたらき」(鑑賞)

この実践では、まず「何の曲でしょう」と問い、当時流行しており多くの子どもたちが知っている曲である『Habit』(SEKAI NO OWARI)の低音パートの演奏を聴かせた。低音パートの演奏のみでは、ほとんどの子どもたちが何の曲かを当てることができなかったため、答え合わせとして曲を流しながら演奏すると、「『Habit』にそんな音があったんだ」「何度も聴いた曲だったけど低音は目立たないから全然分からなかった」といったような感想をもった子どもが多くいた。そこから、「低音は何のためにあるのだろう」という課題を設定し、『Habit』の鑑賞や『茶色の小びん』のリコーダー演奏において、低音がある場合とない場合とを比較することで、その曲想の違いについて捉えていった。その後も何曲か別のポピュラー音楽を鑑賞すると、低音を意識的に聴くことができるようになっていく姿が見られた。

② 第6学年「循環コードをもとにアドリブで遊ぼう」(音楽づくり)

この実践は、複数のコードを繰り返し演奏することで音楽を構成している「循環コード」を伴奏にして、アドリブで音楽づくりをしていくというものである。題材の始めに、循環コードが使われている『Bling-Bang-Bang-Born』(Creepy Nuts)、『強風オールバック』(Yukopi)のコードのみの演奏を子どもたちに聴かせると、同じ音が繰り返されていることに気付いた。2種類や4種類のコードだけで1曲全ての伴奏が成り立つことの面白さを感じ取った子どもたちは、音楽づくりへの意欲を高めながら活動にスムーズに入っていくことができた。

(3) ポピュラー音楽を一つの教材として取り入れた実践

6年生で行ったこの実践では、映画「アナと雪の女王」より『レット・イット・ゴー～ありのままで～』(松たか子)を、一つの鑑賞曲として設定した。曲想と音楽の構造との関わりについて理解したり、曲全体を味わって聴いたりする鑑賞の学びに加え、映像作品において音楽が効果的に使われていることを知ることで、子どもたちが今後映像作品を観る上で、より作品を楽しむことができるようになることをねらって授業を行った。

まず、既習事項である短調と長調の特徴を想起させた上で前奏部分を鑑賞すると、子どもたちはすぐに前半部分が短調であること、さらに、曲の途中で長調に変わること気付いた。そこで、「この曲をつくった人はなぜここで暗い感じのする短調から、明るい感じのする長調に変えたんだろうね」と問いかけた。そして、この曲の調の変化が「アナと雪の女王」の作品においてどのような役割を果たしているかという視点で映像や歌詞を分析していくと、短調のところは登場人物の表情が暗く、歌詞もネガティブな内容であるのに対し、長調になるところで表情も歌詞の内容も明るくポジティブになっていること、さらに、曲の最後に向かうにつれて、使わ



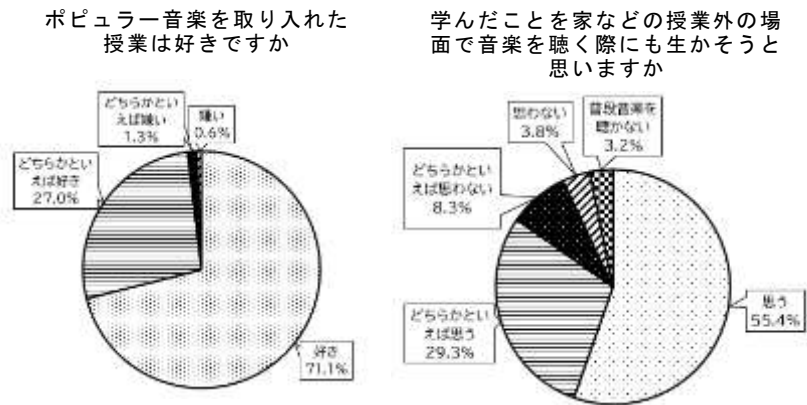
【登場人物の心情の変化を視覚的に示した板書】

れている楽器の音色や音の強さといった要素も加わって曲想がどんどん盛り上がっていき、表情も歌詞もとても明るく自信にあふれたものになっているというところにまで気付いていった。これによって、映画のような映像作品の中で、音楽の授業で学習した「調」の特徴が登場人物の心情を表すために非常に大きな役割を果たしていることを理解することができた。

3 実践の成果

前項の実践についてのアンケートをとったところ、ポピュラー音楽を取り入れた授業が好きだと答えた割合が約 98% であり、その理由としては、「好きな曲だったから楽しかった」「よく聴く曲だけど詳しく考えたことがなかったから面白かった」といった回答が多かった。

教師の見取りとしてもほぼ全ての子どもが強く関心を持ちながら授業に取り組んでいることが感じられた。また、学んだことを家などの授業外の場面で音楽を聴く際にも生かそうと思うと答えた割合は約 85% であり、前述した学習指導要領の「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる」ことに、多くの子どもが意欲的になっていることが言える。さらに、この授業を行った日の家庭学習で、自主的に自分の好きな音楽を聴き、その特徴について調べてきたことをまとめた子どももいた。



4 普及させたい取組と期待される効果

教科書教材と関連させながらポピュラー音楽を取り入れていくことで、生活の中の音や音楽と豊かに関わっていただけるだけでなく、教科書教材の学習も同時に深まっていくと考える。例えば、2(1)①で述べた『つばさをください』の実践であれば、教材とポピュラー音楽との共通点を見付けた上で、もう一度『つばさをください』の歌唱表現の工夫を考えて歌うことで、ポピュラー音楽を聴いた際の視点が付け加えられ、表現がさらに豊かになっていったことが実感できた。また、2(3)で述べた『レット・イット・ゴー～ありのままで～』の学習後には、別の題材においても長調か短調かという視点が自然と子どもたちから出るようになり、学びがつながっている様子が見られた。このような学習を継続して行っていくことで、音楽的な見方・考え方を生活や社会の中でより働かせられるようになり、音や音楽を通した生活が豊かなものになっていくと考える。

5 課題及び今後の取組の方向

ポピュラー音楽を取り入れる授業はまだ取り組み始めたばかりで、まだ多くの実践を積み重ねることはできていない。今後、様々な教材との関連を図ったり、普段の授業から短い時間を使って継続的にポピュラー音楽を取り入れる方法を模索していったりすることで、そういった授業が特別なものではなく、子どもにとって日常的なことになるようにしていきたい。